



八 おしっこ王子夕食を食べる

「ただいま」

僕は塾から家に帰ってくると、リビングルームに入った。パパはソファーにもたれて、缶ビールを飲みながら、新聞に目を通していている。ママは夕食をテーブルの上に並べていた。

「いい匂いだなあ」王子がつぶやく。

「外は寒かったですでしょう。今日はおでんよ。体が温まるわ」

ママは僕がしゃべったものと勘違いしている。僕はおでんのたまごやすじ肉は大好きだけど、だいこんやじゃがいもなどの野菜は苦手だ。

「いただきます」

パパとママと僕とおしっこ王子の四人？で夕食だ。

「たまごに、こんにゃく、とうふに、すじ肉、だいこん、じゃがいも、はんぺんもあるわ。きんちゃくにはおもちが入っているのよ」

ママがおでんの中身を説明してくれる。パパは、ママの説明に合わせて、たまごに、こんにゃく、とうふ、すじ肉、だいこん、じゃがいもを、次々と自分の取り皿に入れていく。

どれにしようかな、と箸を持ったまま、僕はお鍋の中をじっと見つめている。

「まずは、だいこんだな。出汁が沁みている、美味しいぞ」

王子が僕の耳にささやく。

「ええ、だいこんから」僕の箸先が鈍る。

「だいこんは体にいいんだよ。繊維質が多いからね。お通じにもいいんだよ。それに味が染みている、美味しいはずだ」

王子に言われて、僕はしぶしぶだいこんに箸を突き刺し、自分のお皿に運んだ。

「あら、珍しいわね。だいこんから先に食べるなん」

ママが不思議そうな顔で僕を見つめた。

「まあね」僕は大人ぶった顔で返事をして、だいこんを箸で細かく割り、口に運ぶ。

「どうだい、美味しいだろう」という顔で王子が僕の反応を伺っている。

美味しい。でも、美味しいと言ってしまおうと癪にさわる。

「うん。まあまあだね」と答えながらも、だいこんを次々と口の中に放り込む。

「ほう、ほう、ほう」あんまり一度に口の中に入れたものだから、やけどしそうだ。僕は、熱いままのだいこんをそのまま飲み込んだ。

「大王。だいこんが運ばれてきました。この沁み具合からすると、今日の夕食はおでんのようなです」

「そうか。それじゃあ、じゃがいもも、たまごも、すじ肉も、こんにゃくも来るな。栄養満点の組み合わせだ。順番に運ばれてくるから、まずは、だいこんをこなごなにしまえ」

「アイアイサー」

固体班がだいこんに近づく。

「あちー」

だいこんに触れた隊員が思わず離れた。

「大王。熱過ぎて近づくことができません」

「困ったもんだな。主がもっと、ふうふうをして、冷ましてくれないといけないな」

「どうしましょうか。このまま冷めるのを待ちましょうか」

固体班の隊長が大王に相談する。

「よし。わかった。リキッド班の隊長を呼べ。まずは、熱水を吸収しよう」

「アイアイサー」

大王の前に立つリキッド班の隊長。

「だいこんがあまりにも熱過ぎて固体班が消化することができない。先に、だいこんの汁を吸い取ってくれ。汁を吸い取れば、少しは熱が冷めるだろう」

「わかりました」

リキッド班は耐熱用の防護服に身を包むと、ホースでだいこんの汁を吸おうとした。ホースの中を熱い汁が流れていく。

「あっちっちち」

「熱くてホースが持てない」

隊員たちは思わずホースから手を離した。

「うわあ、今度は足が熱い」

「逃げろ、逃げろ」

だいこんの汁が床に溢れだす。隊員たちはうちわであおいだり、口でふうふうしたりと、熱を冷まそうとするがなかなか冷えない。

それにも関わらず、次に、たまごが流れてきた。たまごも熱過ぎて近づくことができない。引き続き、こんにゃくが流れてきた。こんにゃくも湯気が立っている。大王たちの前には、だいこんとたまごとこんにゃくの火山が連なっている。それを遠くから取り囲む大王たち。

「大王。こんなにいっぱいになりましたが、熱くて近寄れません」

「仕方がない。みんな、少しでも冷えるように、うちわであおげ」

「アイアイサー」

個体班やリキッド班の隊員たちが、うちわを持って、だいこんなどの山をあおぐ。うちわを持っていない者は、口でふうふうと息をかける。

その時だ。だいこんとたまごとこんにゃくの山が動いた。

「そんなことで、俺さまを冷やせると思っているのか」

大王立ちの前には、三角のこんにゃくの帽子をかぶり、丸い卵の顔で、輪切りのだいこん体を持つ怪物が立っていた。

「大王。大変です。おでんが怪物になりました」

「うーむ。恐れていたことがおこった。あいつは、おでん三兄弟だ。消化をしないでほってお

くと、食べ物同士がひっついて、怪物になるんだ」

「おでん三兄弟ですか」隊員たちは、茫然とした顔でおでん三兄弟を見る。大王は腕組をしたままじっと怪物を睨んでいる。

「はっ、はっ、はっ」こんにやくが笑う。

「久しぶりに登場できたぞ」卵があたりを見まわしている。

「ひとつ思う存分暴れてやろう」だいこんが体を震わせた。と、同時に、熱い汁が周囲に飛び散った。

「あっちっち」大王たちは思わず後ずさりする。

「大王。どうしましょうか」固体班の隊長が相談するものの、熱くて近づけない。

「うーむ」大王は腕を組んだまま、苦虫を噛みしめている。

「私どもが、あいつを吸収します」リキッド班の隊長が進言した。

「大丈夫か。まだ、熱いぞ」

「このまま、ほうっちはおけません」リキッド班の隊長は、防護服に身を包み、ホースを手に取ると、部下とともにおでん三兄弟に突進した。

「はっ、はっ、はっ」

「俺たちを吸収しようだなんて」

「いい度胸だ」

おでん三兄弟はリキッド班の隊員たちの前に大きく立ちふさがる。

「それ」

「これを」

「受けてみる」

おでん三兄弟がぐるぐると回転し始めた。すると、その回転先から熱い汁が機関銃のように飛んできた。必殺、おでん汁タイフーンだ。

「あっちっち、あっちっち」

隊員たちは防護服を着ているものの、汁の熱さが体に沁みてくる。とても耐えきれない。おでん三兄弟を吸収しようとしたホースは熱さのあまり手から落ちた。おでん三兄弟はまだ回転し続けており、熱い汁が四方八方、上下と飛んでくる。近づく隙がない。。

「大王。やはり無理でした」リキッド班の隊長がうなだれて大王の下に戻って来た。

「うーむ」なすすべがなくて、大王は腕を組んだままだ。

「どうした」

「口ほどにも」

「ないやつらだな」

「あっ」

「はっ」

「はっ」

おでん三兄弟はなおも熱い汁を振りまきながら、高笑いをした。

「熱いまま飲み込んじゃ、ダメだよ。お腹の中が大変なことになるよ」王子が慌てて注意する。

「だって、口の中が熱いんだから」

「口の中を過ぎても、お腹の中はもっと熱いよ」

「確かに、お腹の中が熱いような気がするなあ」

僕はお腹の上から手で触る。冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出すと、コップに注ぎ、一気に飲み干した。